各市町村の沿革

(※「第3回新潟地域合併問題協議会」資料（岩室村，巻町以外の１２市町村），「第6回新潟地域合併問題協議会」資料（岩室村），「第1回新潟市・巻町合併問題協議会」資料（巻町）　より）

目　　次

新　潟　市・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　p１
新　津　市・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　p２
白　根　市・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　p３
豊　栄　市・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　p４
小須戸町・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　p５
横　越　町・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　p６
亀　田　町・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　p７
岩　室　村・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　p８
西　川　町・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　p９
味　方　村・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　p10
潟　東　村・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　p11
月　潟　村・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　p12
中之口村・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　p13
巻　　　町・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　p14

新　潟　市　の　沿　革

新潟市で人が生活を始めたのは，4，000～5，000年前の縄文時代からと考えられています。

人々は砂丘に集落を作り，生活していたと思われます。

市域に関する地名が初めて登場するのは，日本書紀に記録されている「渟足の柵」が最初で，「新潟」という地名は，戦国時代の永禄7（1564）年，京都醍醐寺の僧侶の手控え帳で「ニイカタ」として初めて登場しています。

新潟市のまちづくりは，長岡藩主堀直寄が江戸時代の元和3（1617）年に行った町建てが基本となっており，その後の移転により，現在の古町通，本町通，上大川前通など，本市中心部の町並みが作られました。

また，越後平野の村々で生産された米や品物は信濃川や阿賀野川，加治川を通して新潟湊に集められ，新潟町の商人によって江戸をはじめ北海道や九州など全国へ積み出されていました。湊には商人だけでなく多くの文人・学者などが訪れ，新潟湊は活気に満ちていました。

幕末の天保14（1843）年，新潟町は天領となり，初代新潟奉行として赴任した川村修就は土地の開発，物価の安定，海防，風俗の改善など様々な施策を行いました。特に砂防については，以前から行われていた松の植栽を積極的に進め，26，000本に及ぶ苗木を植え付けています。

新潟町は，幕末・戊辰の激動を経て，アメリカ・イギリスなど5か国との修好通商条約による開港場の一つに指定され，世界に開かれた港町として明治時代を迎えました。

明治5年新潟県令として赴任した楠本正隆は，堀の浄化や道路の改良，区画整理，白山公園の建設など新潟町の近代化を推進しました。

明治22年，市制が施行され「新潟市」が誕生しましたが，当時の人口は43，911人，面積は12．22㎢でした。その後，日清・日露戦争やそれに続く産業革命によって，電気・ガスの供給や電話の設置，鉄道の開業，商工業の振興など近代化が急速に進んでいきました。

大正3年に沼垂町と合併した新潟市は，人口91，604人の都市となり，竜が島・山の下地区で臨港，中央，北の各埠頭が建設され，工場の立地が増加するとともに，大正11年にはバスの営業も開始されました。

また，医科大学や高等学校などの教育施設が設置され，図書館や映画館が開館するなど，学問・芸術も普及していきました。

そして戦後，新しい憲法のもとに政治や教育の民主化が進められ，市議会では初の女性議員が誕生したのをはじめ，6・3・3制による新たな学制が施行され，昭和24年には新潟大学が誕生しました。また，農業では農地改革の実施や栗ノ木排水機場の完成に対応した，大規模な土地改良が行われました。

昭和30年代に入ると，工業化が進み，電化製品が普及するなど，経済の高度成長時代となり，本市でも化学工業を中心に経済発展が始まりました。

しかし，昭和30年の新潟大火や昭和31年ごろから急速に進んだ地盤沈下と海岸決壊，そして昭和39年の新潟国体直後に起きた新潟地震など昭和30年代は大規模な災害が相次いだ時代でもありました。

昭和40年代は新潟地震の復興から始まり，都市基盤の整備や住宅団地の造成，大型スーパーの進出などが進み，経済の安定成長に伴い消費の拡大が続きました。

昭和44年には東港が開港，昭和47年には関屋分水路が通水し，昭和48年には新潟とハバロフスクを結ぶ空路が開設され，新潟バイパス，亀田バイパスが開通するとともに人口も40万人を突破しました。

しかし，その一方では，急激な都市化による，生活環境の悪化や公害の発生などの環境問題が大きくクローズアップされた時代でもありました。

昭和50年代からは，交通体系の整備や国際化の進展，下水道に代表される生活環境の改善などが一層進んでいます。

交通体系では，昭和57年に大宮まで開業した上越新幹線が平成3年に東京駅乗り入れ，昭和60年には関越自動車道，昭和63年には北陸自動車道，さらに平成9年には磐越自動車道が全線開通するなど新潟市は交通拠点としての重要性を一層増しています。

国際交流では，昭和56年には国際友好会館を設置し，平成2年には(財)新潟市国際交流協会が設立されるなど，国際交流の基盤整備を進めるとともに，ソウル，ハバロフスク，ウラジオストク，ハルビン，グァムなどとの国際定期航空路も開設され，市民レベルでの国際交流も活発になっています。

生活環境では，地震により壊滅的な被害を受けた下水道の普及率が平成8年には50％を超え現在では65％に達したのをはじめ，地域の市民活動を支える各種コミュニティ施設やスポーツ施設などの整備が着実に進んでいます。また，来るべき高齢社会に向けた住民の参加による新たな在宅福祉サービスの供給主体として，平成5年に(財)新潟市福祉公社が設立されました。

平成6年には新潟国際情報大学をはじめ，新潟青陵大学や新潟医療福祉大学が開学し，高等教育機関の整備も進んでいます。

また，平成8年4月には中核市の指定を受け，さらに，21世紀冒頭の平成13年1月1日には隣接する西蒲原郡黒埼町と合併し，「新しい新潟市」としてその第1歩を踏み出し，翌平成14年6月にはアジアで初めてのワールドカップサッカー大会を日韓の開催地のひとつとして開催しました。

現在も新潟市は「市民ひとり一人が光り輝き，人間として尊重される市民主体都市の創造」を基本理念として，市民生活を取り巻く社会環境の変化に対応したまちづくりを推進しています。

新　津　市　の　沿　革

新津の歴史は，古くは旧石器時代までさかのぼります。縄文遺跡は20ヶ所が確認されており，弥生時代後期には，日本海側最北の高地性環濠集落といわれる「八幡山遺跡」のような大規模な拠点集落が姿を現わします。さらにこの弥生集落が廃絶した後，同一山上に墳丘約60メートルに及ぶ県内最大規模の円墳が造営されたことも明らかになっています。

“新津”の名が初めて歴史に登場するのは，『吾妻鏡』において建仁元（1201）年に新津四郎という名の武将についての記述がなされたのが最初です。この時期の武士たちが所領名を姓とすることが多いことから，鎌倉時代初めには，集落を形づくっていたものと考えられます。

その後，新津氏歴代の居館「新津城」を中心として村が発展してきましたが，江戸時代に入ると，大部分を新発田藩による統治を受けました。新発田藩は代々農業重視の政策をとり，領内の治水開墾に努め，その結果，新津近郷でも多くの新しい村落が誕生しました。近郷村落の発展につれて，新津は次第に地方経済の中心となり，新発田藩は明暦元（1655）年，町割りを実施しました。この頃の新津は戸数約140戸，人口1，000人余と記録されています。津川船道や三国街道の宿駅として町は一層の発展をみせ，享保11（1726）年には「定期市」が開かれ，名実ともに商業のまちとしての基礎が固まりました。また，これよりさき，草水町の山中で，「煮坪（にえつぼ）」なる石油の自噴地が発見され，その後田家や金津方面の山中から石油が採掘され，燈火用の油として使用されていました。

新発田藩は村々を組に分け，組には庄屋を置いて治めていましたが，この頃の新津組大庄屋は古田氏が務めていました。明和4（1767）年以降は桂氏が大庄屋を務め，新津の文化土壌をはじめあらゆる面で影響を及ぼし明治維新に至ります。明治維新をむかえるころの新津は，戸数649戸，人口3，000人余と増大し，“まち”としての顔を整えていました。

明治12年，中蒲原郡役所が新津に置かれ，郡制による諸官庁が整備されるにいたって，新津は中蒲原の政治・文化の中心地となりました。明治22年4月には町村制施行により，現在の新津市域には，新津町をはじめ1町9か村が成立しました。このときの新津町は，戸数1，211，人口は6，676人でした。その後，明治34年には，三興野村を合併しました。

新津がその名を全国に知られるようになったのは，“石油のまち”としてです。江戸時代初期に発見された石油は燈火用として使用されていましたが，その生産量はわずかなものでした。それが明治中期以後，新しい技術が導入されて産油量は飛躍的に増大し，いたるところでヤグラが林立して製油所は軒をならべ，空前の新津油田全盛期を迎えたのです。この黄金時代は大正の半ばまで続きましたが，産油量は次第に減少し，石油ブームは歴史の彼方へと過ぎ去ってしまいました。

石油ブームの次は，“鉄道のまち”として脚光を浴びるようになりました。明治30年11月，「北越鉄道」が開通し，新津駅が開業しました。その後，岩越線（磐越西線），新発田線（羽越線）と相次いで開通し，接続駅としての重要性が高まりました。大正期に入ると保線区や機関区，運輸事務所なども開設され，昭和16年には新潟鉄道局新津工場も設置され“鉄道のまち”としての地位は不動のものになりました。また，次第に駅前通りに商店街が形成され，にぎわいを見せるようになりました。

この間，大正14年には満日・阿賀浦両村を，次いで昭和14年には荻川村も合併して人口約3万人の町に成長，中東蒲原の中心都市としての基礎を固め，昭和26年1月1日，新潟県内で7番目に市制を施行しました。当時の人口は，37，370人，世帯数6，889，面積39．64㎢と記録されています。そして昭和30年には小合・金津両村と，また32年には新関村の大部分と合併して，ほぼ現在の新津市が形成されました。

昭和39年には新潟地震に見舞われましたが，幸いにして当市の被害は軽微なものでした。この年は新潟国体が開催され，新津市では高校の軟式野球とボクシングが行なわれましたが，軟式野球に出場した新津高校が大会初の地元優勝の金字塔を打ち建てました。

この後，昭和41年の「7．17」，翌42年の「8．28」と，たて続けに豪雨が襲い犠牲者を出す大きな災害となりました。また，昭和53年には「6．26梅雨全線豪雨」により，災害救助法の適用を受ける大きな被害が出ました。

中心商店街は，昭和44年の新津駅前通りを皮切りに，新津市の目抜き通りである「本町通り」に次々にアーケードが完成し，これを機に沿線商店街で店舗の新・改築や共同ビル方式の近代的店舗が出現し，商店街の様相が一新しました。

昭和56年，新津バイパスが開通し，県都新潟市までの所要時間が大幅に短縮されました。また，この年，公共下水道の供用を開始したのを皮切りに，昭和60年に新消防庁舎，63年に新水道庁舎と新市庁舎，そして石油の世界館，花き総合センターが次々に完成し，観光施設の充実とともに行政機関の郊外移転と併せ都市基盤の整備が進められました。また，昭和58年には，市内を貫流する能代川による水害の抜本的解決策として進められてきた「能代川分流」（現能代川）が完成し，住民の歓喜の声とともに暫定通水を開始しました。

平成3年，市内6番目の駅として「さつき野駅」が開業，平成6年には，磐越自動車道新潟～安田間が開通し，新津ICが設けられました。また，この年，旧国鉄時代も含めてJR初の自社車輌工場となる「新津車輌製作所」が操業を開始し，平成11年には，市立新津第一小学校の校庭に保存されていたC－57型蒸気機関車が「SL磐越ものがたり号」として29年振りに復活，再び“鉄道のまち”がその息吹を吹きかえしました。

平成7年には，緑豊かな新津丘陵に総延長30kmに及ぶ「木もれ陽（び）の遊歩道」が完成，平成9年には，この遊歩道エリアの一角，「県立植物園」に隣接して「新津市美術館」がオープンしました。平成10年には「第15回全国都市緑化にいがたフェア」が開催され，「県立植物園」を新津会場として30万人の来場者を迎えました。

平成14年，新潟薬科大学新津キャンパスが開学，現在これを核とした「バイオリサーチパーク構想」の実現にむけ，産・学・官・地域一体となった取り組みが進められています。

新津市では，「水と緑のまち」「明るく元気なまち」「にぎわいと交流のまち」「個性豊かな文化のまち」の4つのまちづくりの基本目標に基づき，「緑の風薫り　笑顔ゆきかう　ふれあい文化都市」という将来像の実現に向けたまちづくりを推進しています。

白　根　市　の　沿　革

新潟平野のほぼ中央部に位置し，日本一の大河信濃川とその支流である中ノ口川に囲まれた白根市に人が住みはじめた年代は特定できませんが，周辺遺跡などから5世紀前後と推定されます。

中世末この地区は小吉条と呼ばれ，低湿地や沼地ほとんどのため，自然堤防沿いに集落が発達。比較的標高の高い南部では中世以前から新田開発が進められていたと推定されます。13世紀の庄瀬馬場屋敷遺跡からは，武士的性格を持つ支配者が農民を支配したことを物語る多くの遺物が発見され，当時の様子を伺い知ることができます。

近代になるとこの地区は小吉郷と呼ばれるようになり，慶長3（1598）年，新発田藩領となり，一部を除いてその支配は明治まで続きました。郷内には120余りの農業集落がありましたが，その中で白根町は水運中継地として発展し，鉄器，繊維，仏壇などの産業が栄え，宿場町としても知られました。特に白根絞りは日本の三大絞りとして白根町の重要産業として位置づけられ，仏壇は今なお伝統工芸産業として発展しております。

小吉郷は周囲をぐるりと堤防に囲まれた輪中状で郷内には多くの沼や潟があり，度重なる洪水も加わって，農民は水との闘いに明け暮れました。その中で農民は新田開発に取り組み，こうして造られた耕地は2，300町歩（2，300ヘクタール）で，現在の全耕地面積の5割にも達するものでした。しかし，新田といっても湛水田がほとんどで，郷頭と郷尾の標高差が6メートル程度の当地では自然排水には限界がありました。現在のような乾田になるには，動力排水の導入と大河津分水工事の完了を待たなければなりませんでした。

大正13年には大河津分水も完成し，近代の小吉郷は飛躍的な発展を遂げました。広大な新潟平野は沃野となるとともに，洪水のない生活が実現し，全ての農業基盤である大地の壮大な造成を促しました。

明治維新後に町村制が施行されると，郷内には白根町，新飯田村，茨曽根村，小吉村，林村，庄瀬村，菱潟村，浄楽寺村，臼井村，大郷村，鷲巻村，根岸村の12自治体が誕生し，明治35年の町村合併で小吉郷は1町8カ村の行政区画となり，昭和30年まで続きました。

小吉郷が白根郷と呼ばれるようになったのは大正末期からで，郷内の包括的治水事業を推進する白根郷普通水利組合が大正13年に作られて以来，白根郷と呼ばれることが多くなり，小吉郷の呼称は自然消滅していきました。

昭和30年には1町8カ村が合併して白根町になり，昭和34年6月1日に白根町は白根市として市制施行し，現在の白根市形成の基盤が整いました。 ちなみに，合併時の世帯数は5，941戸，人口としては37，715人でした。

合併後の住民生活や生活環境充実支援としては，中ノ口川堤防の決壊をはじめ，新潟地震や大型台風による被害，それに豪雪など幾多の被害・災害を受けた時代もありましたが，橋梁復旧をはじめとして災害支援に意を注ぐ一方，白根高校の開校や市内小中学校の給食開始，そして行政庁舎，消防庁舎の新築，戸頭浄水場，新ごみ処理場の完成など，行政基盤の整備充実も図ってきました。さらに，行政の出先機関として位置づけていた支所を地区公民館と併設し，地域生活センターとして整備充実も図ってきました。そのことにより，地域に密着した行政サービスと地域コミュニティとしての拠点づくりも進む一方，市内小中学校統合校の開校，保健センターの完成など教育・健康面からの人づくりも推進してきました。

また，スポーツの拠点施設としてカルチャーセンターを建設し，国内外で活躍している選手を招聘しての各種スポーツ大会の開催やオリンピック選手の輩出などスポーツを通しての交流活動も盛んに行われるようになり，近年では白根学習館の建設や広域行政による公共施設の相互利用など，市民の生涯にわたる学習支援と住民交流の基盤整備に努めてきました。

新たなまちづくり事業としてはニュータウン建設計画を策定し，土地区画整理等により計画的な宅地開発を進めてきました。今日では，新潟市のベッドタウンとして人口も急増し，さらなる都市整備の充実を推進するため，公共下水道事業への着手をはじめ消防・救急体制の整備・充実など，市民が快適で安全な暮らしやすいまちづくりを進めてきました。

工業では北陸・常磐自動車道などの高速交通時代を背景に，市の中央部に和泉工業団地，新潟市に隣接した地域に北部工業団地を造成，現在では31社が操業し内陸型工業の要として着実な伸びを示しています。また，商業は国道8号開通により，市民の生活様式や価値観の多様化など時代の変化から現在では国道8号沿線での店舗が増えており，大型店の出店や時代ニーズに即した店舗が増加してきています。反面，旧市街地では空き店舗も目立ちはじめ，旧来の商店街形成が難しい状況も出はじめてきています。農業では，大規模な用排水路改修工事，耕地整理や先人のたゆまぬ努力により肥沃な大地を資産として手に入れることができました。現在では稲作を基幹産業として，果樹，野菜，花きなども多く栽培され，中でも桃，梨，葡萄は県下随一の生産量を誇り，夏から秋にかけては観光果樹園が開園するなどフルーツのまちとしても知られるようになりました。

また，初夏の風物詩として名を馳せている白根大凧合戦は，300有余年の歴史を持つ伝統行事として，観光イベントとして市民の誇りであり，白根市の歴史を語る上で欠くことの出来ない事業であり，しろね大凧と歴史の館の完成とともに通年観光の一翼を担っています。

白根市ではこれら今までの歴史や風土を大切に継承しながら，これからの地方分権社会を市民とともに形成していくため，平成8年度には，「交流と創造，自然と共生，躍動のまち」を将来像とする第四次総合計画（平成17年度目標）を策定しました。この計画の中では「自立型生活最適都市の創造」を基本理念に，個性的で魅力ある白根市を形成するために，7つの戦略プロジェクトを推進し，住んで良かった，これからも住みたい白根づくりを進めています。

豊　栄　市　の　沿　革

越後平野の北東部，阿賀野川下流の右岸に位置する豊栄市。この豊栄の歴史は上黒山遺跡を最古とする縄文時代に始まります。今から約5，500年～5，000年前の縄文時代前期には人々が暮らしていた形跡が確認されています。その後，人々の生活領域は拡大し，海岸砂丘や阿賀野川の自然堤防上に定住するようになりました。そして，慶長3（1598）年，溝口秀勝が新発田藩6万石城主となり，豊栄が新発田藩領となったころには人々の生活も阿賀野川の自然堤防を中心に海岸砂丘の内部にまで広がっていたことが，当時の文献史料から確認されます。

しかし，市域の開発が進んだのは，江戸時代の享保年間に入ってからであり，享保15（1730）年，阿賀野川の松ヶ崎掘割工事により，福島潟を残して一帯が干上がり，福島潟や島見前潟など潟周辺の開拓が進みました。 その結果，下興野（上）新田（葛塚，嘉山），内島見興野（木崎），太田興野，早通など，現在の豊栄市域が新しい村として成立していきました。

市の中心の葛塚は，宝暦11（1761）年に江戸幕府から許可を得て市場が開設され，安政年間（1854～1859年）には，農民の作業着として重宝がられた銘柄「葛塚縞」の産地として知られるようになりました。また，明治8年から新井郷川，阿賀野川，通船川を経て新潟へ至る「葛塚蒸気」が運行され，近郷近在の経済，交通の要衝として栄えてきました。

市域の大半は低湿地を開拓して開かれた土地であるため，江戸時代は絶えず水害に見舞われ，明治時代になっても明治29年を始めとして連続水害が続きました。人々は機械排水機を導入したり，水害予防組合を結成し，大正3年には加治川分水路の堀割，続いて新井郷川の改修を行いました。その結果，農業基盤の整備改良が進み，生産の向上をみて，町の商工業も発展し，人口も増加しました。また，第2次世界大戦後の農地改革が行われるまでは，耕地の大半が市島家・白勢家などの蒲原大地主の小作地であり，度々，地主・小作間の対立や紛争が起こりました。大正11年には，新潟県三大小作争議の一つとして有名な「木崎小作争議」が発生しています。

本市は昭和30年に葛塚町，木崎村，岡方村が合併して豊栄町を新設し，昭和34年に長浦村を編入しました。その後，特例法の適用を受け，昭和45年11月1日に市制を施行しました。

この間，昭和31年に国鉄白新線の全通，昭和34年に国道7号の新潟～新発田間の全線舗装，昭和39年に新潟地区新産業都市建設計画区域の指定を受け，昭和44年には，この拠点である新潟東港が開港しました。

このような情勢を背景に，県営住宅に代表される早通団地をはじめとして，尾山や葛塚周辺などで宅地開発が行われ，県都新潟市の近郊住宅都市としての役割を担うようになりました。

さらに昭和57年に上越新幹線，昭和60年に関越自動車道，昭和63年に北陸自動車道，平成元年に国道7号新新バイパス，平成9年に磐越自動車道がそれぞれ開通しました。また，平成元年に豊栄北部工業団地が，平成5年には豊栄中部工業団地が造成され，県内外の企業が進出し操業しています。

平成8年には日本海側唯一の中核国際港湾である新潟東港において，5万トン級の外貿コンテナ埠頭が暫定供用開始され，さらに新潟東港を含む新潟港地域が輸入促進地域の指定を受けました。平成10年には新潟FAZ計画に伴い，第1期の基盤施設である定温くん蒸施設が建設され，今後，第2期の基盤施設である国際物流センターの建設も予定されています。

平成11年には21世紀初頭の礎となる「豊栄市第四次総合計画」がスタートし，この年はじめて人口が5万人を超えました。

平成12年には市制施行30周年を迎え，各地で様々な記念行事が開催され，また，文化創造の拠点として市立図書館が完成しました。

平成14年には日本海東北自動車道の開通や新潟大外環状線の一部供用開始に加え，新潟東港の背後地における物流団地の造成が完了し，本市が物流拠点として発展する高い可能性を有しています。また，豊栄新潟東港インター周辺の開発や豊栄駅周辺整備等の都市基盤整備も着々と進んでいます。

さらに念願である福島潟放水路も暫定通水し，水との闘いの歴史を繰り返してきた本市もようやく水害のないまちへと変わりつつあります。

本市の東南部に位置する福島潟は，市の歴史・自然の象徴であり，かけがえのない財産です。本市では福島潟とその周辺の失われかけている自然環境を保全，復元し，後世に継承していくため，平成9年に「水の公園福島潟」をオープンしました。現在，福島潟周辺は自然と共生したまちづくり・人づくりの拠点として位置付けられ，さまざまな取り組みが行われています。

豊栄市は，現在も第四次総合計画に掲げる「市民が主人公」「自然との共生」「活力あふれる交流」の3つの基本理念に基づき，「人と自然が共生する活力あふれる交流都市」を目指してまちづくりを推進しています。

小須戸町の沿革

小須戸町は，新潟市の南約20kmに位置し，北は新津市，西は白根市，東は五泉市，南は田上町に隣接し，信濃川沿いの小須戸地区とJR信越線沿いの矢代田地区の2つを中心に形成され，面積は16．91k㎡の小さな町です。

小須戸町の地名はもちろん，その生成も発展も信濃川を離れて考えることはできません。小須戸町は，地形的に菩提寺山（248.4m）・高立山（275m）を分水嶺とする新津丘陵の地域と信濃川の造成した沖積低地の地域とに2分することができます。

新津丘陵の地域には縄文時代の遺跡が多く，沖積低地の地域には比較的新しい奈良時代以降の遺跡が多くみられます。

現在のところ，小須戸町で発見された土器などは縄文時代前期の特徴を示すものであり，今から約5，500年前のものと推定され，これが最も古い人類の痕跡を示すものであります。

現在の小須戸町域は，小須戸・横川浜・小向・水田・鎌倉新田・天ケ沢新田・矢代田・新保・竜玄新田の9つの集落から成り立っていますが，この大字集落による町立ては，明治時代の町村制施行によって確定され今日に至っていますが，そのもとは江戸時代の「村」でありこの「村」の多くは，さらにさかのぼって戦国期に「村」の形を整えたものと思われます。

現在の小須戸町域は江戸時代初頭以来一貫して新発田藩領であったが，寛永元（1789）年から矢代田村だけが幕領となり明治に至ることとなるが，江戸末期においてこの基本的な形態は町立てが行われてからほとんど変わっておらず，当時小須戸町は，信濃川を利用した水運の面では，もっとも重要な幹線であり，年貢米などの集積地として，三条―新潟間の船路の中継地点にあり，陸路の街道もあってにぎやかな町場になっていました。

明治3年に発令された「越後村替」の結果，現在の町域内の各村々はすべて新発田藩下におかれ，廃藩置県により新発田県管轄となった後，統合により新潟県管轄となりました。

明治22年に町村制が施行され，小須戸町・横水村・新保村・矢代田村の1町3村が誕生し，その後明治34年11月の合併によって，現在の小須戸町が誕生しました。

その時の小須戸町は，戸数1，550戸，地価約30万円となり当時としては大規模な町でありました。

明治30年に矢代田駅が開業すると，輸送の中心はしだいに船から鉄道へと移っていき，米・花き・球根さらには石油の積み出しの面で大きな役割を果たすこととなりました。

昔より盛んであった織物業は，江戸時代が始まりといわれており，その品質の高さから評価も高く「小須戸縞」として県内外に広まり，明治期において県内では亀田町につぐ，木綿縞の産地であり，その後も第1次世界大戦がもたらした好景気などで飛躍的に発展し，当町を代表する産業となっています。

また，「花とみどりの町」小須戸のキャッチフレーズにあるように，昔から花き・花木などの園芸が盛んで，江戸末期より行われていたものといわれていますが，現在では鵜出古木地区を中心にアザレア・ボケ・さつき・シャクナゲなどを主として栽培されており，特に「ボケ」は，日本一の産地として県内外に広く知られているところです。

このように，肥沃な農地と地場産業に支えられ発展してきた小須戸町は，道路の改良・舗装，上水道や下水道などのインフラ整備などを進めるとともに，小須戸町総合計画に合わせ，教育施設・福祉施設，産業施設，公営事業等の増強を行い，豊な自然と環境を生かした町づくりを進めてきました。

平成5年4月には，「花と緑のシンボルゾーン」を開設，平成7年4月には，温泉センター「花の湯館」を開館し，多くの町内外の人々が訪れにぎわっており，町の観光事業の一翼を担っています。

平成11年には，町制施行110周年を迎え，さらなる町勢発展を目指し平成14年3月に策定した第4次小須戸町総合計画に基づき，「まごころと花と緑のまち小須戸」をキャッチフレーズに，21世紀における新しい町づくりに向け，町民一人ひとりが健康で活き生きと暮らせる，活力と魅力あふれるまちづくりを推進しています。

横　越　町　の　沿　革

県下最大の穀倉地帯である越後平野の中央に位置する横越町には，平野部では最も古い砂丘列があり，今から約5，000年前の縄文時代前期末から人々が住んでいた形跡があります。近年の町内遺跡の発掘調査成果によると，平安時代中頃の9世紀末には，すでに現在の横越町の集落の原型ができていたことが明らかとなりました。 古代に引き続く中世には，水運が重要な交通手段であったことから，阿賀野川は越後と会津を結ぶ重要な動脈として，また，横越はその水上交通における拠点の一つとして大変重要な役割を担うことになり，明治・大正時代まで，行き交う帆掛け舟の姿がよく見られ，その重要さを文献史料からうかがうこともできます。

江戸時代になると，横越は新発田藩横越組（後に蒲原横越組）の大庄屋所在地として，横越島と呼ばれた一帯の約110数か村（現新潟市，亀田町，横越町の大部分）を束ねる政治的中心地，県下最大の穀倉地帯の一角となりました。また，江戸時代初期には，沢海の地に，新発田藩の支藩である沢海藩（1万4千石）が成立。その拠点として阿賀野川と小阿賀野川の合流地点付近に沢海城が置かれました。沢海藩は，慶長15（1610）年から貞享4（1687）年までの77年間で廃絶，改易となりますが，その後，沢海は20年間の幕府領時代を経て，6千石を有する旗本小浜氏の知行地となり，明治維新まで陣屋が置かれていました。このため，沢海は新潟市近郊でも珍しい城下町の景観を今にとどめています。 明治維新を迎えた横越は，明治初期には幾多の行政組織の再編を経験します。明治22年，全国的な市制・町村制施行と同時に，横越・沢海・木津・二本木・小杉の各村が自治体として独立。さらに明治34年11月にはこの5か村が将来の発展に備えて合併し，ここに現在の横越町の姿が整いました。

さて，江戸時代後半に発達した地主制度は，明治から大正にかけて全盛期を迎え，現在国の登録文化財に指定されている北方文化博物館の伊藤家は，県下一の大地主となりました。戦後の農地改革によって多くの農地を手放しましたが，現在は昔の豪農の面影を今に伝える博物館として，毎年多くの観光客が訪れています。

横越町の歴史は，亀田郷の中にあって湿田に苦しみ，水害との闘いの歴史とも言えます。以前は阿賀野川・小阿賀野川の水害により，多くに犠牲が払われてきました。大正時代に行われた河川改修，戦後の農地改革で優良農地が広がり，自作農が増えると，酪農，養豚等の経営化が進みました。稲作を中心に梨などの果樹，野菜，チューリップなどの栽培が急成長。都市近郊型の農業が展開され，おいしい農産物の生産供給地となっています。

近年の町の成長には，交通網の整備によるところが大きく，昭和39年の横雲橋の永久橋化，平成7年の国道49号横雲バイパスの開通，平成9年の新潟大外環状線大阿賀橋の開通，平成13年の県道新潟港横越線の4車線化，関越・北陸・磐越自動車道の開通など交通網の整備につれて，木津工業団地の造成や住宅地の開発が大きく進みました。その結果，他市町村からの転入により人口が増加し，平成7年には人口が1万人を越え，平成8年11月に「横越村」から「横越町」へ町制を施行しました。人口増加とともに大型店が進出を続け，農工商バランスのとれた産業発展が図られています。

また，産業面の発展だけでなく，住環境の整備にも取り組んできました。昭和36年に広域簡易水道供用開始，46年にごみ・し尿の収集開始，52年に新潟市との共同施設である阿賀野川浄水場が完成，55年からは公共下水道の整備が進み，平成14年には全町下水道が完了する予定となっています。また，平成元年に老人福祉センター・デイサービスセンター，平成9年に保健センター，平成11年には福祉ゾーンに特別養護老人ホームが完成し，子どもから高齢者までだれもが安心して生活できる環境の充実を図りました。

また，まちづくりは人づくりという考えに立ち人材の育成に力を注いできました。明治5年以降，各地域に学校が建てられ，いち早く教育村としてスタート。昭和51年，村内4小学校を1校に統合し，スクールバスを導入し，教育の充実を図ってきました。平成13年には，子どもセンターが設立され，家庭・地域・学校・行政が連携を図りながら，子どもたちの健全育成に取り組んでいます。平成14年からは中学校の改築が始まり，教育環境の整備を進めています。また，小・中学生海外研修など，子どもたちの国際感覚を磨く事業も展開しています。地域コミュニティの育成にも力を注ぎ，町内各地区に施設整備を進め，地域公民館を設置し地域に根ざした活動を展開しています。

平成10年に策定した第四次総合計画の「緑豊かないきいきとした町　よこごし」をキャッチフレーズに，人と自然の調和を大切にした住みよい活気に満ちたまちづくりを推進しています。

亀　田　町　の　沿　革

亀田町は，砂崩地内から4，000～5，000年前に人類が生活していたことを物語る縄文中期土器が出土するなど歴史の古さを示していますが，元禄7（1694）年，周辺の物資を集めて中谷地新田に市場町を創設したことにより急速な発展を遂げました。

完成した亀田町（大字）は信濃川，阿賀野川の二大河川に囲まれた湿地帯である，亀田郷の中心に位置する立地条件を活かして，水陸交通の要衝として，市場の町，商業の町，織物の町として郷（ごう）内経済の中核的役割を果たしました。

明治に入り，数次の合併の後明治22年4月1日に町制を施行し，同34年に袋津村を，大正14年に早通村を合併して現在の亀田町が誕生しましたが，当時の人口は12，794人でした。

近世の亀田町は，亀田，袋津，船戸山を中心とする商工地帯と他の農業地域に分けられます。

織物は農家が農閑期にはじめた機織りにはじまりました。江戸時代中期享保以来の伝統をもち，木綿縞（じま）生産も次第に盛んになりました。明治40年には新しい機織りの出現により，農家の副業から工業生産の方向に変革する大転換期を経て，昭和の最盛期には，亀田縞織物産地として当町を代表する産業となりました。

農業は原野を開拓してできた亀田郷の農地で，低湿田に悩まされた農家の人々は，水との闘いの連続でした。この先人たちの，たゆみない努力により農地も次第に改良されました。戦後の農地改革に次いで，昭和24年土地改良事業により，大規模な用排水路改修工事，耕地整理が行われ，乾田化した美田となりました。こうして農業生産が飛躍的に向上し，商・工・農業の均衡のとれた町として栄えてきました。

昭和39年，新潟地区は新産業都市の指定を受けて，新潟市における東港と臨海工業地帯の造成を中心とした産業開発，新幹線，高速道路交通体系を拠点とした中枢管理機能計画が策定されました。こうした一連の経済活動の伸展は亀田町の産業にも影響を与え，なかでも商工業へのウエイトが高まり，地域経済の中心的な役割を果たしてきました。

亀田町は，新潟市の衛星都市として位置付けられ，ベッドタウン化の進行が著しく都市基盤，生活環境の悪化などいくつかの都市問題が生じ，昭和44年，新都市計画法が施行，同45年に市街化区域及び市街化調整区域の決定を行いました。

その後，住宅・人口増加に対して，上水道拡張，学校施設整備，下水道整備，道路新設改良などに努めてきました。その一方，中心市街地（既成市街地）では，人口が飽和状態となりましたが，今日では減少傾向となっています。変わって郊外に新しい市街地が形成され，人口は着実に増加しています。

昭和61年に国道49号（亀田バイパス）西側に「亀田工業団地」を造成，今日では32社が進出しています。西部地域には平成2年に役場新庁舎が建設され，周辺地域においては機能的な都市環境や都市機能の整備が始まりました。

平成6年7月には北陸自動車道新潟亀田インターチェンジが開通し，平成9年10月磐越自動車道が全通，同年11月に北陸自動車道も新潟空港インターチェンジまで開通しました。

今後，主要地方道新潟亀田内野線を中心として，業務・商業機能の集積が高まることが予想されます。特に国道49号亀田バイパス鵜ノ子交差点を中心とする地域では，複合型の土地利用による，大規模商業施設が開店し，新しいまちづくりが展開されることにより，地域経済の活力と活性化・雇用増大と同時に魅力ある都市空間の創出が今後期待されます。

平成8年には亀田町総合運動公園「アスパーク亀田」がオープンし，幼児から高齢者まで楽しみながら健康づくりができるスポーツ活動の拠点として整備され，町民をはじめ周辺市町村の方々から，広域的施設として利用されています。

平成9年には特別養護老人ホーム「向陽の里」，身体障害者療護施設「あさひ園」，「県立新潟ふれ愛プラザ」が完成し，平成11年6月の亀田駅暫定東口の開設によりこれら福祉施設へのアクセスが格段に向上し，福祉文教ゾーンとして人にやさしいまちづくりを進めています。

また，「亀田駅周辺地区」は再優先重点整備地域として，亀田駅の東西地域の一体的整備を図るため，東西自由通路，駅舎橋上化，東西駅前広場など都市基盤整備を進めています。

亀田町は，古い伝統と新しい都市が機能的に連携した「田園エポック都市かめだ」を創造し，「人にやさしく，緑豊かな，都市的魅力あふれるまちづくり」を基本理念としたまちづくりを推進しています。

岩　室　村　の　沿　革

岩室村は，青竜寺遺跡などから縄文土器が発掘されており，これらの遺跡などから，今から約3000年～約4000年前の縄文中期後半から後期の前半頃に，岩室村の山麓や比較的平坦な丘陵斜面において生活が営まれていたことがうかがえます。その後，弥生時代，古墳時代を経て，山麓部の暮らしから次第に沖積平野へと居住範囲が拡大されてきました。

そして，中世期以降，本村の大部分は荘園時代弥彦の荘に属し，弥彦神社の社領であったのではないかと考えられています。その後，江戸中期以降には旧和納村の大部分は三根山藩の主軸を構成し，旧間瀬村は桑名藩に，旧岩室村は直領長岡，与板藩等の数藩に分属していました。

さらに明治以降，大区･小区の制度が廃止され，現在の町村自治体の基盤ができた明治22年に，石瀬，岩室，船越，和納，鴻ノ巣，間瀬の6か村が誕生，その後明治34年には石瀬，船越，岩室の3か村が岩室村を，和納，鴻ノ巣の2か村が和納村を形成しました。そして，昭和の時代となり，昭和30年に町村合併促進法により，岩室村，間瀬村が対等合併し岩室村を形成，その後，幾多の経緯をへて昭和35年に，岩室村，和納村による対等合併が成立し，現在の岩室村が誕生しました。

また，岩室村は歴史と観光と温泉のまちとして栄えてきましたが，特に，岩室温泉は，正徳3（1713）年に開湯したと伝えられる別名「霊雁の湯」が，北陸街道の宿場街として古くから県内外の人たちから親しまれてきました。その他にも，岩室村では農業をはじめ水産業，林業などの産業振興を推進してきましたが，なかでも基幹産業である農業では，土地の集積化により年々規模拡大が推進され，併せて転作推進等に関連した複合営農にも取り組んでいます。

交通面では，国県道，村道，広域農道とも着実に整備が進められており，県都新潟市まで車で約40分，そしてＪＲ越後線が電化となってからは約35分と，新潟市までの通勤圏となっております。

住環境整備面では，昭和50年に県住宅供給公社により大規模住宅団地が整備され，それを機会に緑豊かな街づくりが進められており，並行して昭和56年から農村総合モデル事業により，排水整備，集落道整備，農村公園などの整備を進めるとともに，平成6年度には岩室村農村環境改善センターを建設いたしました。さらに平成13年度からは，農村振興総合整備事業にも取り組み，さらなる環境整備を推進しています。また，下水道整備については，平成17年度一部供用開始に向けての整備が進められています。

社会福祉面での推進につきましては，昭和45年に老人福祉施設「静閑荘」をオープン，昭和58年には保健センターを役場庁舎と併設設置，また平成7年には健康増進センター「よりなれ」を建設し，村民の健康増進を図ってきました。そして平成8年にはデイサービスセンターと介護支援センターを設置し，社会福祉の推進に努めるとともに，岩室地区（温泉街）に労働衛生医学協会による温泉病院，老人保健施設「いわむろの里」や成人病検診センターの誘致を行い，さらに平成13年度には，身体障害者療護施設並びにケアハウスの誘致を行い，既存保育園を含めて同地区一体を医療福祉ゾーンとして位置付け，一層の福祉の充実を目指しています。

また，社会教育･学校教育の面では，昭和62年に生涯学習推進基本構想を策定し，生涯学習を全村的に推進し，広域的な連携を図りながら生涯学習メニューの充実を図ってきました。平成3年には和納小学校，学校給食センターを建設，さらに平成6年には岩室小学校を建設，そして，平成9年に村立図書館を建設するなど，社会教育･学校教育環境の整備充実に努めてきました。

産業振興面では，基幹産業である農業，自然の利を活かした酪農，漁業，林業，温泉を核とした観光業，そして商工業と，村の経済を担う各産業分野が広域的な連携を図り，自然環境や人々の生活の中でバランスを持って振興する「活力のあふれる村づくり」を目指しています。特に岩室温泉ではホテル，旅館等への安定給湯のために特別会計を設置し，源泉井戸の掘削，給湯体制の整備に取り組んでおり，さらなる観光客の増客と，今後は新潟圏域の奥座敷として発展が期待されています。また，漁業関係では，県営間瀬漁港として，毎年修築事業が実施されており，さらに隣接地には，平成12年度に埋立が完了した間瀬海岸公有水面埋立地に公園整備（県工事）も半分完了しており，残る未利用地の開発を含め，今後の地域振興の一助としての取り組みが待たれています。

最後に，岩室村では，平成11年に策定した第四次総合開発計画で「ゆうの里　いわむろ」の将来イメージとして①豊かな自然を背景に，それを上手く活用する村「自然の裕」　②やさしさとふれあいに満ちた田園生活を送れる村「人の優」　③村内外の有機的な連携を強化して活力を高める「産業･村づくりの湧」を3本柱として，誰もが住みたくなる希望に満ちた村づくりを推進しています。

そして，これからも農林水産業，観光業，商工業の均衡のとれたむらづくりを展開していきます。

西　川　町　の沿　革

西川町は，浦田遺跡から古墳文化時代後期の遺跡が出土され，およそ1,400年前に稲作や狩猟をして生活していた形跡があります。また，西川流域以東には十世紀以前の住居跡などの遺跡が数多く発見されており，遺跡の所在の特徴として，西川右岸の自然堤防上を占地するものと，鎧潟の北方の低平な水田地帯を占地するものに大別されることから，西川流域と鎧潟を中心とした地域に集落を作り，生活していたと思われます。

町域に関する地名が始めて登場するのは，寛正4（1463）年の山城国嵯峨の持地院が上田御局にあてた文書に「曽祢村」の文字が登場します。

曽根村は京都府の持地院の領地であったと考えられ，その後，元和4（1618）年から長岡藩の領地で蒲原組に属していました。元和6（1620）年には曽根組が設置され代官所がおかれました。

曽根代官所は長岡藩の穀倉地帯の要として，また，長岡藩の六か組の一つの曽根組を支配するために，南は粟生津，北は新潟村，西は岩室，東は漆山，五ノ上までの近隣77か村の行政，司法，徴税を司るため，現在の曽根小学校地内に，慶応4（1868）年までの約250年間設置されていました。

発祥当時の曽根村は，西川右岸の自然堤防上に出来た村落であり，西川の水運を重要な交通手段として生活を営んでいました。

西川は，江戸時代には唯一の物資輸送路で蒲原船道と呼ばれ，西川筋の米が新潟や長岡へと運搬されていました。

明治22年には，全国的な市制・町村制施行と同時に，それぞれの地域に33か所あった村が，鎧郷村・西川村・曽根村・升潟村の4村に合併されました。さらに，明治34年11月には鎧郷村・西川村が合併し鎧郷村となりました。

その後，昭和5年12月に曽根村が町制施行で曽根町となり，昭和30年3月には曽根町と鎧郷村が合併し，西川町（にしがわまち）となりました。

昭和36年6月には，西川町と升潟村が合併し，西川町（にしかわまち）が誕生し，その後，昭和37年11月に潟東村の一部が編入され，さらに鎧潟干拓事業（約270ヘクタール。昭和33年から昭和43年まで）として土地改良事業が実施された結果，昭和52年に巻町の鎧潟の一部を編入し，また，西川町大字矢島の一部を巻町へ編入し，現在の西川町が誕生しました。

合併後の昭和40年代においては，町営ガスの供給，町道舗装工事，国道116号線供用開始（巻町～新潟市保古野木）及び県道黒埼西川線（升潟バイパス）の開通など，都市基盤整備が本格化されました。

また，都市基盤整備のほか，農村工業導入促進法に基づく工業導入地区として，旗屋地区と升岡地区が指定され，今日では31社が進出しています。

昭和50年代においては，鎧郷・曽根・升潟の各小学校校舎が竣工し，また，学校給食共同調理場の竣工，運営を始め，教育施設の整備が図られました。

また，町営野球場や町営テニスコートなどのスポーツ施設の整備を行い，町民の健康増進を推進してきました。

昭和60年代からは，交通基盤の整備や橋梁の整備，社協センターの設置に代表される保健福祉の推進などが一層進んでいます。

交通基盤の整備では，昭和62年に県道黒埼西川線（貝柄バイパス）の全線が供用開始されたほか，町の主要幹線である，県道白根・西川・巻線の拡幅改良が行われました。

橋梁の整備では，新川橋や善光寺橋，新潟の橋100選にも選ばれた諏訪大橋，矢島橋がそれぞれ整備されました。

社会福祉の推進については，昭和61年に福祉の拠点となる社協センターを設置したのを始め，平成7年には保健センター，平成8年にはデイサービスセンターと在宅介護支援センター，平成9年には特別養護老人ホーム「花見の里」，平成14年には高齢者ふれあいセンターが完成し，子どもからお年寄りまで，安心して生活できる福祉のまちづくりを進めてきました。

平成3年には西川町の新しいシンボルでもある「西川ふれあい公園」が完成し，幼児からお年寄りまでがふれあえる公園として，町内外から親しまれているとともに，各種イベントやスポーツ大会の会場として大いに賑わっています。

平成7年にはテニスコート，ゲートボール場，ランニングコースなどを備えた「スポーツパーク西川」を整備し，隣接している町営野球場や升潟町民プールと併せ，スポーツゾーンとして利用されています。

西川町は，平成8年に策定した第三次総合計画の「一人ひとりが輝く田園文化都市　西川町」を目指し，町民一人ひとりの充実した人生のため，いきいきふれあいのまちづくりを推進しています。

味　方　村　の　沿　革

味方村は，縄文時代中期から後期にかけての土器が発見されていることから，4，700年前には先住民がこの地で生活していたことがうかがえます。また，570年ころには既に農耕が営まれていました。

「味方」という地名の由来は寛治20（1108）年，越後に乱入した黒鳥兵衛を，この地に住んでいた笹川越平が官軍・加茂次郎源義綱に味方して討伐したことに始まる，といわれています。

慶長3（1598）年ころから新田開発が行われるようになり，信州から味方へ移住してきた笹川氏が慶安2（1649）年に村上藩の大庄屋に任命され，近隣8か村を治めました。この笹川氏の邸宅は文政9（1826）年の建築ですが表門と石灯籠は天正年間（1570年頃）のものです。表座敷は武田菱をあしらった切妻起り破風の玄関を塀垣近くに造り，母屋が大きく右手に伸びた，非対称形の一重の寄棟造りになっています。昭和29年に国の重要文化財に指定され，今なお往時の面影を色濃く残しています。

江戸時代には幕府直轄領，村上藩，新発田藩に分かれて統治されていた味方村は，明治時代に入り，新潟県の所轄となり，明治34年11月，白根村，味方村，七穂村の3村が合併して，現在の味方村が誕生し，今に至っています。

味方村は，新潟平野のほぼ中央に位置し，信濃川の分流である中ノ口川に沿うように集落が形成されています。数百年来の水との闘いの中で，先人たちが血と汗を流しながら築いてきた肥沃な大地を基盤に，稲作を中心に栄えてきました。農業の省力化を目的に区画の大型化を含めた水田の基盤整備は周辺地域に先がけて昭和36年から実施され，一区画20㌃，30㌃，36㌃に整備，一部地域ではパイプ灌がい等水利条件整備も順次進められてきました。また，この地域は県内でも著名な地盤沈下地帯であったので，排水能力の低下から昭和63年に国営広域排水七穂排水機場が稼働し，田畑輪換や品質向上のための適切な水管理が可能となりました。また，最近では野菜，切り花，畜産，キノコを取り入れた経営の複合化が進められています。

信濃川とその分流中ノ口川の洪水による水との闘いの中で，それを克服しながら人々はいろんな娯楽を行ってきました。その一つが300有余年の伝統を持ち，全国的にも有名な白根味方大凧合戦であり，若者から壮年まで世代間を超えた全村挙げての一大観光イベントとして毎年盛り上がりを見せています。

また，農業を取り巻く情勢が年々厳しさを増していく中，地域活性化のため，昭和57年に千日上工場団地を南部に，平成11年には北部に居宿工場団地を造成し，積極的に企業誘致を図り，農商工業の調和の取れた村づくりを進めてきました。

昭和30年代後半から40年代前半にかけて，味方村は水害や第二室戸台風，新潟地震など相次いで災害に見舞われました。新潟地震後，村内では復旧作業が進むかたわら生活基盤の整備が進められて行きました。白根市と周辺4町村による，ごみ・し尿・火葬処理と消防の事務組合がそれぞれ発足，ガスの供給もこの頃開始されました。また，自家用天然ガスの汲み上げによる地盤沈下が深刻化し生活環境が悪化しましたが，昭和49年には「農村総合整備モデル事業」の指定を受け，以後16年間，総事業費21億円をかけ，集落内排水や集落内道路などを整備したことで生活環境は飛躍的に向上しました。

さらに，水質の保全に努め，限りある資源を活用するため，平成9年度から公共下水道事業に取り組み，現在，急ピッチで整備が進められており，平成16年度から一部地域で供用が開始される予定です。

急速に進む高齢化社会に対応するため，在宅介護支援センターを老人保健施設「常磐園」に併設，平成12年に保健センター，デイサービスセンターが完成し，介護保険制度の円滑な実施と村民の健康を生涯にわたって守る様々な健康づくり事業を行っています。

教育においては，昭和50年に3校あった小学校を1校に統合。隣接する中学校は平成3年に新築され，恵まれた環境の中で地域に根ざした教育を実践しています。また，人材育成事業として，子どもたちを対象にオーストラリアへのホームステイ研修をはじめとした，海外・国内研修を行っています。

社会教育では，公民館本館，村民体育館をはじめ，野球場，プール，テニスコートなどが建設され，住民の余暇活動に大いに利用されています。現在は，公民館分館の改築工事が進められています。

「明るく豊かで活力ある味方村」をテーマに，緑豊かな自然と共存しながら，住民一人ひとりが地域社会の中で自ら考え行動する意思を大切にし，住民と行政が一体となって誰もが健康で心豊かな生活を送れるような村づくりを進めています。

潟　東　村　の沿　革

潟東村は太古の昔，海であったと想像され，信濃川及びそれらの分流によって沖積陸地になってからも沼沢地帯では一面の芦原をなしていたと推定されますが，昭和30年の土地改良耕地整理工事の際に発見された樋切遺跡から須恵器，土師器の陶片が出土したことから弥生時代後期には人々が住んでいたと思われます。

現在の潟東村の基となる四ツ合村は中世紀以降，荘園・弥彦荘に属し，旧幕時代は各藩が交錯して統治していた。また大原村は比較的新しく，旧幕時代は小村に分立し，明治34年の町村廃合により大原村となったがその沿革は一様でない。その後，昭和33年に西蒲原の中央であった「鎧潟」を名残として，その東部に位置することの故を以って「潟東村」の新村名で四ツ合村と大原村が合併して現在に至っております。このようにはじめに「鎧潟」ありき。

わが村の歴史は水と土との闘い，開拓そのものでありましたが幾多の時代変遷の中で信濃川分水工事，新川改修工事，また土地改良事業が進められ，そして西蒲原郡一帯のへそ地であった鎧潟も昭和30年代に干陸化され，かつてのたん水地帯も平坦美田地帯と変貌しました。

潟東村の基幹産業は農業であり，近年の田圃の集積化により平均耕作面積は27反で過去「潟東の農業，成り立たねば蒲原の農業，成り立たず，日本の農業成り立たず」と自負してまいりましたが昨今，水田単作から近郊農業への脱却が急がれています。

なお，昭和53年9月に高速道路北陸自動車道の開通は巻町・潟東村インターの開設となり，それにともなっての工場進出，住宅団地の造成は著しく，近い将来，パーク＆ライド施策の導入により更なる宅地開発が予想されます。

また，文化，教育では昭和45年に当時では全国でも珍しい「村立樋口記念美術館」の建設，「体育館・昭和60年竣工」「歴史民俗資料館・平成3年竣工」「保健，福祉センター・平成6年竣工」，平成13年「ゆう学館」の竣工等，これら各施設の1カ所集中を図り，健康づくり，福祉，教育，の連携の相乗効果で「健康で文化の香り漂う潟東村」の実現を目指しています。

集い，学び，遊び，憩う「ゆう学館」です。

老人日帰り施設，老人憩いの家，図書館，公民館，これらの機能全てを包含した社会教育施設と高齢者福祉の複合施設です。施設内容の特色として大きな浴室があり，「憩いと学び」を中核として世代間の交流と活力，想像力を備えた人づくりを目的にしているユニークな複合施設です。

保健福祉分野では「保健福祉センター」内にデイサービスセンターと介護支援センターを設置し，広域での特別養護老人ホームの建設，子育て支援としての学童保育センターの建設で，子どもから高齢者まで安心して暮らせる生活環境の整備充実に取り組んでいます。また，地域コミュニティの育成充実には地区集会所建設の補助金制度，村民運動会，村の冬の風物詩「かもん，カモねぎまつり」「どろんこカップ」等のイベント行事に表れています。

※「かもん,カモねぎまつり」

かつての鎧潟は鴨猟が盛んでした。今でも趣味として鴨猟を楽しんでいる人が多数います。そして，水田単作からの切り札として「やわはだネギ」の生産奨励が行われた中で，その消費拡大として，このイベントが行われました。その内容はドラマ仕立ての鴨猟の実演とネギがたっぷり入った熱い鴨汁が大人気のイベントです。

平成11年度から平成20年度までを計画期間とする潟東村第4次総合計画を策定しました。「健康で文化の香りただよう潟東村」の建設を掲げ，よりよい村づくりを推進しています。

月　潟　村　の　沿　革

奈良時代の土師器，須恵器が村内で発見され，その時代が月潟村の夜明けであると考えられています。

徳川時代は高崎，新発田，村上の三藩に支配され，明治4年廃藩置県の際，柏崎県第2大工小7区に属し，更に明治12年郡制改正により西蒲原郡川前組に編入され当時の部落がそれぞれ明治17年に改称されました。

明治22年4月，全国的な市町村施行と同時に9ケ村が合併し秋津村（大別当村・月潟村・西萱場村），曲通村（上曲通村・下曲通村），中合村（東長島村・木滑村・釣寄村・釣寄新村）が誕生した後，明治39年4月，3ケ村が合併し，ここに現在の月潟村となりました。

中ノ口川の流域のため，たびたび破堤等による水害にあい，水稲の生産性も至って低く大正12年，大河津分水の完成により災害が少なくなりました。また，湿田地帯のため農作業の利便性は低く，昭和26年区画整理事業によってこれらの悪条件が排除され，土地生産性が向上されました。先人たちのたゆまぬ努力と中ノ口川沿いの肥沃な立地条件を生かし，米や果樹などの農業を中心として発展してきました。

月潟梨の栽培の歴史は古く，江戸時代文化年間に上総国（千葉県）より梨苗＜類産＞を求め始められました。現在では品種改良が進み果樹産地として成果を上げています。

月潟鎌は明治の中頃には既に産地として形成され，抜群の切れ味と耐久性は使う人に喜ばれ関東・東北方面に売られ昭和中期まで越後鎌として名声を高めました。しかし，農薬等の普及により年々需要が減り鍛冶屋も減少を続けています。

角兵衛獅子の発祥の年代は不明と言われています。江戸時代には全国を渡り歩き京都，江戸では年の始めの慶祝に悪魔払いとして欠かすことのできない行事となりました。昭和8年児童虐待法の発令によって幼童を使っての軽業や大道芸は姿を消しましたが，関係者の熱意で村の伝統芸能＜角兵衛獅子＞として復活し，現在は保存会の努力で小中学生の有志により受け継がれています。

交通面では，昭和24年中ノ口川に月潟橋が架設されたことに伴い，従来の渡船通行による不便さが解消され，当時，対岸白根市との交流も密接化し商業の発展をも促しました。昭和8年には新潟交通電鉄線が開通し経済・産業面等に大きく貢献しましたが，残念ながら平成11年に廃線となりました。新潟交通より客車，貨車，ラッセル車を譲り受け今は旧月潟駅構内に保存してあります。

近年は，道路整備等や北陸自動車道や上越新幹線など高速交通網の発展に伴い立地条件にも恵まれ各種企業の進出がめざましく村のイメージが大きく変わりつつあります。

昭和46年に老人憩いの家月寿荘が作られ，村内のお年寄りや一般村民の憩いの場として広く利用され，平成8年には保健センターが完成し，村民健康づくりの拠点とされています。

住環境整備は下水道の平成18年供用開始を目指し準備を進めています。同時に消雪パイプの敷設，歩道のバリアフリー化に努めています。ごみの分別収集の徹底を図り，平成13年に環境美化推進条例を施行し，美しく住みよい地域社会の形成を進めてきました。

昭和54年から農村総合モデル事業が始まり宅地排水整備，農業集落道整備，多目的施設の建設，農村公園整備，平成2年には農村環境改善センターを竣工しました。昭和61年に防災行政無線システムが開局し，役場と家庭を結び各種情報の提供や災害時の緊急通報は効果をあげ村民に喜ばれています。平成5年には農業農村活性化農業改善事業により生産性の高い農業の合理化・近代化を推進し，中核的農家の育成，生産組織の育成のためカントリーエレベーターを建設しました。

平成4年には＜つきがた＞という同じ名前を持つ北海道樺戸郡月形町と姉妹町村協定を締結しました。文化や産業，そして，小学生から大人までのさまざまな交流を続け視野を広げ友好の輪は広がってきています。村づくりは人づくりからの理念のもと教育立村を掲げ，村の将来を担う子供たちの個性と創造力を育むため，平成5年に新中学校移転改築や平成8年には村民図書館を建設するなど教育環境を整備して高等教育への進学率向上に努めてきました。

平成13年に策定した第四次総合計画の＜人と自然が織りなす角兵衛獅子の里　つきがた＞をキャチフレーズに，文化と活力のみなぎる豊かで，すこやかなつきがたむらの創造を将来像に掲げむらづくりを推進しています。

そして，これからも農業・商業・工業の均衡のとれたむらづくりを展開していきます。

中之口村の沿革

越後平野のほぼ中央に位置する豊かな農業地帯である中之口村は，越後平野の形成過程では必ずしも明らかとなっていませんが，信濃川上流より運ばれた土砂により，現在の蒲原平野が形成されなかった以前はところどころに砂州ができ，そこへ蒲が生え，ごみや泥が堆積し小さな陸地が形成されたことで「小吉島」と呼ばれる「小吉郷」がこの地域の始まりと言われています。範囲ははっきりしませんが小吉郷97カ村といわれたことから現在の中之口村はもとより燕市や白根市，味方村までの広範に及んだことが伺われます。

村落の起源については，早い集落で鎌倉から室町時代と推定され，洪水の恐怖に脅かされながら半農半魚の生活が営われたであろうと言われていますが，中ノ口川の築堤により川筋が固定することで地域の開発も進みました。地域の開発には開発郷士の活躍が著しく，戦国の終わりに信州や越中より武士や浄土真宗の門徒が入植したことが伝えられおり，寺院の形成とともに現在と同様の地域集落が形成されました。

中でも澤将監は武田家の家臣でしたが上杉氏をたより，この地に定着し打越地区の開発を行い，約130年余りで現在の集落と同様の地域を形成したことにより，代々大庄屋として処遇されています。村では当時の門や邸宅を復原し開放しており，先達の偉業を称えた先人館と共に多くの観光客で賑わっています。

江戸時代になると，当地域も幕藩体制の中に組み込まれ三条藩，村上藩，高崎藩，直轄領，新発田藩と次々と領地の交代が行われています。その頃は新田開発が奨励されており，新開地が次々と現れ水利の問題が続出します。水との戦いがこの地域の歴史であったともいえます。

集落については現在の1集落が1村として分村独立していましたが，村の東地区では明治22年に7ヶ村が合併し小吉村を設立，西地区においても同様に道上村，打越村，三針村が誕生，燕市寄りの地域では3村の合併により加奈井村が設立されています。

その後明治34年に三針村が小吉村と道上村に合併し，打越村と道上村が合併，加奈井村は松長村と合併しています。また，昭和の大合併になると一度は燕市となった松長村の一部と道上村，小吉村が合併し現在の中之口村となっています。

近代までの村の産業は，生業から新田開発などで急速に生産量を増やしていった米作りになりますが，全国でも有数の大地主が誕生し，富の一極集中が行われました。しかし戦後の農地解放と，それに続く土地改良事業により堀上田と呼ばれる湿田は解消され，農業生産は飛躍的に向上し農家の経済も急速に改善されました。更に機械の中之口村といわれるほど農業機械の導入が進み，米の生産量も急速に向上しました。

しかし，昭和40年代に米余りから減反政策が始まり，小規模な農家は兼業農家として，他に副業や近隣の工場等への勤労者として生計を立てることとなります。

ちょうどその頃，隣接の燕市の金属加工業が盛んになり，農家の軒先がその下請けの工場に早替わりし，村内の地場産業の基礎が形成されました。

合わせて米のみに頼っていた農業ですが，中ノ口川の堤防沿いに古くから行われていた果樹栽培が脚光を浴び，全国に先駆けてハウス葡萄の栽培が行われました。

現在でも米作と桃，梨，葡萄などの果樹栽培は本村農業の中心となっています。

農業を基幹としながらも，多くの村民の定住を目指し新たな地域開発を行うための，農村工業導入地域の指定を昭和59年に受けて，小吉地区に初の工業団地の造成を行いました。その後全線が開通した高速自動車道の巻・潟東インターチェンジ周辺の開発に着手，昭和60年以降3次にわたり同地域に工業団地の造成を行い，好立地を生かして物流関係会社中心にその進出を見ています。合わせて定住化の促進を図るため，村では村内4箇所の住宅団地の造成を行い，民間の宅地開発と合わせて約150戸の住宅が建設されています。

また，社会資本の整備として，昭和58年に完成した総合体育館の周辺をスポレック中之口と名付け，野球場，テニスコート，B&G海洋センタープール，農村環境改善センター，先人館を集中させ，村民のスポーツの振興と文化や創造の発信地を形成しています。

更に高齢者の生きがいづくりの中心地として，平成7年に建設した総合福祉センター周辺を福祉ゾーンとして位置付けデイサービスセンター，高齢者支援センターを配置，更に民間の特別養護老人ホームの誘致を予定し，一層の充実を目指しています。

今後も，第四次総合計画に盛られた「潤いとやすらぎのある村づくり」を将来像としてその実現のために努力して行きます。

巻　町　の　沿　革

巻町の歴史は古く、県内最古の古墳である山谷古墳をはじめ数多くの遺跡が丘陵地帯から発見されています。なかでも古墳時代前期に造営された菖蒲塚古墳は、前方後円墳として著名で優秀な鏡をもつなど、大和政権と結びついた地方首長の墓と考えられています。

巻の地名については定かではありませんが、古くは槙・真木と書かれ、アイヌ語のマク（山手・奥・後ろ）や牧（牧場）の当て字、さらには信濃川の洪水のうず「巻」く地などが地名の由来とされています。

中心地の巻は、近世には長岡藩巻組の中心地として同藩の代官所が置かれ、近傍の村々を支配していました。また角田山麓の三根山（現峰岡）周辺の村々は、牧野家三根山領となり、幕末には三根山藩領として統治され明治を迎えました。

明治12年、郡区町村編成法により西蒲原郡巻村となり郡役所が置かれ、明治22年町村制施行により13の村が成立しました。

明治24年には巻村が町制を施行し、さらに明治34年に施行された町村合併で6か町村となりました。

昭和30年1月1日、町村合併促進法により巻町・漆山村・峰岡村・松野尾村・角田村・浦浜村の1町5村が合併，新生「巻町」が発足し、その後、同年7月10日、西川町の一部（葉萱場・中郷屋・割前・羽田・東汰上）を、昭和35年4月1日には岩室村の一部（安尻・下和納）を編入し、現在の巻町となりました。

昭和30年代には現在の巻町立病院の前身である巻国民健康保険直営町立病院が地域の中核を担う病院として開院、鎧潟干拓国営事業の起工、新潟国体のホッケー競技会場誘致、県内最初のセンター方式による学校給食センター完工、県立巻工業高等学校、興農館高等学校が開校し巻高等学校、巻農業高等学校と併せ4校の県立高校を有するなど西蒲原郡の政治、経済、教育、文化の中心地としての態様の土台が築き上げられました。

昭和40年代は、シーサイドライン（現在のR402）オープン、R116の開通、北陸高速自動車道の起工、新巻駅舎の完成など現在の高速交通体系の骨組みが作られ、農業面では角田山ろくで柿団地が造成、また新潟県巻総合庁舎をはじめとする県養鶏試験場、県青少年教育センター、税務署、職業安定所などの国県の出先機関庁舎が整備されました。

また、以後巻町を混乱に陥れた原子力発電所問題が浮上してきたのもこの年代でした。

昭和50年代には小中学校の再編が進み、巻北小学校、巻南小学校の開校、巻東中学校、巻西中学校の同時開校のほか新潟県農業大学校の開校など教育施設の整備がさらに進められ、巻町文化会館、公民館の開館、入徳館野外研修場、城山野球場の建設など教育、文化、スポーツ行政の振興が図られました。

昭和61年には新浄水場が完成し全町に上水道が行き渡るようになりライフラインの整備が進められました。昭和62年には巻・潟東IC周辺に漆山企業団地の造成がはじまり、その企業進出により地域経済活性化に寄与しています。今後ますます進展が予想される高度情報化、高速交通時代の当町の玄関口として、IC周辺の発展が見込まれる地域となっております。

また観光面でも従来から佐渡弥彦国定公園の核として風光明媚な海・角田山を有する当地域に、新たに平成5年にオープンした温泉保養施設「じょんのび館」は日帰り温泉施設の先駆けとして町内外から年間26万人超を集客するなど魅力あふれる広域観光エリアの一員として、また地元の雇用創出にも大きく貢献しています。

平成8年には町を二分して紛争が繰り広げられてきた「原子力発電所建設の可否を問う住民投票」が全国で初めて実施され、住民意志の選択により建設ノーの結論が出されました。

その後、町有地売却、訴訟問題と紆余曲折を経て平成15年12月の最高裁判決を受け、電力会社による原子力発電所建設計画の撤回表明により30有余年続いた同問題は事実上終止符が打たれました。

この間、巻町は昭和47年から3次にわたる巻町総合計画を策定し、魅力ある地域づくりを目指し、生活関連社会資本の整備や社会福祉・保健医療・行政等の充実などを推進してきました。現在も平成10年に策定した第4次巻町総合計画に掲げる「豊かな自然、あふれる文化、活力ある産業で一人ひとりが輝く巻町」を将来像に掲げ町づくりを推進しています。